

たなばた

むかし、あるところに、働はたらきものの若わか者がいました。

ある日のこと、きれいな娘むすめが若者のうちにやってきて、

「わたしを嫁よめさまにしてくださいませんか」といいました。

若者は、びっくりして、

「あなたのようなどこの大家たいかのお嬢じょうさまかわからないきれいな人を、こんな貧乏びんぼうな家にもらうわけにはいかん」といつてことわりました。娘は、

「いえ、貧乏はかまいません。ぜひとも嫁よめさまにしてください」といいました。若者は、

「では、年を切つて、嫁にもらいましょう」といいました。ずっといつまでもではなく、年数を限つて嫁にもらうということです。

嫁よめさまは、かしこい嫁よめさまで、ふたりは幸せに暮くらしました。

そのうち、じきに年が明けてしまいました。嫁よめさまは、

「やくそくの年数がたつたから、おひまをいただきます」といいました。

若者は、

「行こまつてもらつては困こまる。行かずにずっとここにおつてくれ」と頼たのみました。けれども、嫁よめさまは、

「いいえ、始めに年を切られてしまったから、どうしようもありません、おひまをください」といいました。そして、若者にユゴの木をわたして、

「じつは、わたしは天人です。これから天に帰りますが、きつとまた会いましょう。

どうかこのユゴの木を庭に植えてください。百日たつたら木は天につつかえるでしょう。そうしたら、木をつたつて上がつてきてください」といいました。そして、すうつと天にのぼつていきました。

若者は、家のわきにユゴの木を植えて、毎日毎日待ちました。待ちかねて、九十九目に上がつていきました。百日といわれていたのに、九十九日目にいったので、あと少しで天にとどきませんでした。嫁よめさまは、それを見て、長い髪かみの毛をほどこきました。そして、

「これをつかんで上がつてきてください」といつて、髪の毛を天からぱつと投げま

した。若者はその髪の毛をつかんで上がってきました。そして、嫁さまの家に行つて、いっしょに暮らしました。

ふたりは、天の畑をたがやして、なかよく暮らしました。

ある日、若者は、野良へ出かけるときに、嫁さまにいいました。

「庭にきゅうりがたくさん生っているけど、とつてはいけないよ」

昼ごろ、嫁さまは、

（何もおかしくないし、『とるな』っていわれたけど、このきゅうり、一本とつて食べよう）と思いました。きゅうりをとつて、ほうちようでごつと切ったら、切ったところから大水が流れだしました。水は、どんどん流れて、畑で働いていた若者をおし流しました。若者は、

「たすけてくれ、たすけてくれ」とさげびましたが、どんどんどんどん流されていきます。嫁さまは、たすけることができません。嫁さまは、

「せめて年にいちど、七月七日に会おうなあ」とさげびました。

それが、たなばたの日です。七月七日に、切ったきゅうりを水に流して無事を祈れば、水の難から逃れるといつて、むかしの人はきゅうりを水に流したそうです。

おしまい

原話…『奈良県吉野郡昔話集』国学院大学説話研究会  
再話…村上郁